

## 「ロストカムイ」の舞台ができるまで

### 床州生

2024年9月25日

聞き手：谷地田未緒、笹村律子

構成：谷地田未緒

——：今日は「ロストカムイ」の制作のお話と、州生さんが関わってきた阿寒の様々な舞台のお話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。州生さんはこれまで木彫り作家としても活動されていますが、舞台の関りはどうでしょう。

床州生：僕が東京から阿寒に帰ってきたのが24歳ぐらいの時だと思うんだけど、そのころ（1990年前後）この辺の景気がすごく良くて、アルバイトも5、6人使って（店を）やっていて、忙しいから、一人息子だし、帰ってこいといわれてイヤイヤ帰ってきた。だいたい東京に3年、横須賀に2年くらい住んでいた。帰ってきてアルバイトの人たちと一緒にお店で働いていた。そのころってシーズンオフとシーズン中がはっきり分かれていて、まりも祭りが終わるとシーズンオフだった。だから帰ってきたころは冬は沖縄に1ヶ月行ったりしていた。で、父がユーカラ座の座長をやっていて、声をかけられていたけど、父親がやっているからということで、興味が無いとか照れ臭くて手伝っていなかった。でもそこでも人手が足りないからと言われ、最初は千家盛雄さんと一緒に裏方にはいっていた。それで手伝い初めて、そのうち舞台にも立ってくれないかといわれた。僕は子供の頃は踊りは習ってなかった。（阿寒アイヌ民族）文化保存会もまだなかったから、子供達に教えるようになったのは僕の10歳下くらいから。だから自分は帰ってきてからアイヌの踊りを覚えた。ユーカラ座も何度か出演した。その頃はもうパリ公演も終わっていて、日本国内で公演をしていた。主役は秋辺デボさんがやっていた。自分の役は魔人。秋辺今吉さんの手下だった。

——：デボさんがアイヌラックルで、今吉さんが魔王ということは、舞台では親子対決だったんですね。

床州生：確かね。それから今吉さんがだんだんお歳でうまく動けなくなったころ、俺は体が大きかったから魔王役もやってくれといわれた。

——：最初に始めた裏方の方はどのようなことをしていたんですか？

床州生：音響や照明。昔は機材もなかったし、「ロストカムイ」をやるようになってから機材にだいぶ詳しくなったけど、その頃はよく分かってなかったから、言われたボタンを押すような感じだった。今みたいにコンピューターで制御していないので、舞台のタイミングでボタンを押さないと音が出ないし、灯りもつかない。

——：そのあと阿寒湖では、イオマンテ劇や人形劇など様々なプロダクションが生まれましたが、それにも関わっていますか？

床州生：ユーカラ劇は魔王として出演していたし、人形劇は自分としては初めて外部の人と一緒に舞台を作った。ユーカラ座はアイヌが主体で動いていたけど、人形劇は、人形をつくるとか、台本を外部の人がつくったりしていて、関わって面白いなと思った。人形劇の最初の作品、「ふんだりけったりクマ神さま」なんかは本当に面白いなと思ったし、台本の質も高い。そのころ自分は（阿寒アイヌ工芸共同）組合の理事に入っていて、出演はしていなかったけれどこれはよい演目だと思っていた。けれど宣伝などがあまりうまくできなくて、営業としてはいまいち振るわず、それぞれ短い期間で上演は終わってしまった。人形劇というと子供向けと思う人も多かった。阿寒湖に来る観光客のうち、アイヌ文化に触れようと思ってくる人は、100人中1人位だと思う。それは今も昔も変わらないと思う。阿寒湖に来てホテルで食事をして、その後に「古式舞踊っていうのがある」と初めて知ってくる人が多い。だからそれまで興味がなかったひとに人形劇というと、さらに混乱する。人形劇って小さな人形がちょこちょこ動いているイメージがあるけれど、僕らがやったのはそうじゃない。人形を作る先生も、「里見八犬伝」の人形劇をテレビでやっていた本格的な先生で、その人に教えてもらって澤井和彦さんがリーダーとして人形を制作したし、話もただ単に真面目なアイヌとカムイの話でなく、ウィットに飛んでいた。タイトルも、「踏んだり・蹴った

り」という動きと「ふんだりけったり」という表現がかけ合わさっていたり。カムイが宿っている石を「踏んだり蹴ったり」したことが話の中心になっているから、面白いと思っていた。ユーカラ座に出ていた人も出てなかった人も、発声練習から初めて、声も出てくるようになった。国立民族学博物館や、倉敷によばれて上演したことがあって<sup>1)</sup>、そういうところできると結構喜ばれていたから、勿体無いプログラムの一つだったなと今でも思う。

——：人形劇の後、すぐ「ロストカムイ」に繋がっていくのでしょうか？

床州生：「ロストカムイ」の前に「カムイルミナ」がある。札幌にコタンの組合が懇意にしている映画会社があって、そこの社長がプロジェクトマッピングをいち早く北海道でやっていて、阿寒湖でもやったらどうかというアドバイスがあった。シアターイコロで実際にプロジェクターを持ってきて映像を流して、音楽をかけて僕がちょっと踊った。そうしたら見ていたコタンのメンバーが「カムイの世界ってこういう感じじゃないのか」といった。後で映像を見たら、今までユーカラ劇とか、人形劇とかで表せなかった表現の一つだなと思って、ぜひやりたいと思った。これをやるために予算はどのくらいかかるかと聞いたら、2000万円だという。そのころは、東日本大震災があったところで、シアターイコロにはぜんぜんお客さんが入っていなかったの、その話は流れた。その次に、モーメントファクトリーというカナダの会社に来て、「ルミナ」という彼らの作品を阿寒湖でやりたいという話になった。それにもさっきの映像会社の人が、カナダに旅行に行った時にみたら面白かったということで、アイヌの物語をつかって日本で2番目の「ルミナ」を作りたいという話になった。お客さんの誘致のためには僕らもやりたい。だけど、モーメントファクトリー社は、「ボッケ遊歩道」のロケーションが良いのでそっちでやりたいと言ってきた。コタンの周りで「ルミナ」をやらないと、コタンの集客にはならない。その時も工芸組合の理事のなかでこの案件の担当をしていたので、「ボッケでやるならアイヌの話は貸したくない」と言った。シアターイコロと同じ時間帯でやると、お

客さんが取られてしまうから。そうしたら、その話に乗っていた当時の観光協会から「なんとかシアターイコロにも予算をつけるから、ルミナはボッケでやらせて欲しい」と頼まれた。しばらく交渉して、予算もきちんとついたので、「それならルミナも全力で手伝います」という話になった。

しかし当初、シアターイコロの方も「ルミナ」と同時進行でモーメントファクトリーが制作するという話になっていたの、ちょっと不安になって、通訳を通じて担当者に「もしかしてシアターイコロの方に、ルミナの二軍的な人を送り込んでいるつもりはないか」と聞いたら、向こうははっきり「そうだ」と言った。彼らは、自分たちがいま一番やりたいのはルミナであって、若手がイコロの方を担当するという話になったので、それでは嫌だと反対した。その頃日本語が通じないことで、細かいニュアンスが通じないので困っていたら、ルミナの手伝いできていたクリエイターの一人が、「僕はそっちに関わりた」といって手を挙げてくれた。これが坂本大輔さん。彼と一緒に、最初から「ロストカムイ」を制作した。ルミナの方も、声優を選んだり、劇中で使う音楽のレコーディングなどは、自分と坂本に任せてもらったので、日本で録音した声優の声や音楽をカナダに送って、制作は向こうで行われた。

——：「カムイルミナ」の方もユーカラが元になっていますね。

床州生：そう、あれは四宅ヤエさんに伝わる、カケスが大飢饉を救ったという話。アイヌの物語の中でも、これに似た話は各地にある。主人公が違ったりすることも。ここでは、ヤエさんに伝わっている版をやりたいたことになった。「フーンコフンコ　フーンコ　アイヌコタン」という部分、100年くらい前のヤエさんの録音が残っていたので最初はそれだけを使っていたけれど、物語の終盤に来ると、その孫の平（四宅）智子さんの声も被さって、ヤエさんから智子さんにユーカラが伝わっていくという隠れたメッセージもある。これも僕と坂本が一緒に考えたアイデア。

——：ルミナもロストカムイも、阿寒湖アイヌコタンからの強い協力体制がなければ絶対にできない

作品ですね。そのコタン側の中心になっていたのが州生さんということですね。

床州生：そう。ルミナの経験はロストカムイの方にも決定的に役立った。最初は、俺が意見を出して通るようなプロジェクトじゃないと思っていた。アイヌの話とか、全体的なことをみればいいのかなど思っていたら、意外と、いろいろ気がついたことがあって。例えばフクロウのセリフは、おじいさんだけど低く通る声がいいとか、「フンコフンコ」を繰り返すのと同じで、セリフの前に「ホーホー」といったらどうだろうかとか、そういうアイデアも通った。制作中、エゾフクロウの翼が短い、実際は2メートルもあるのに、というNGが阿寒の方から出たとき、僕は実写に近づくより、ファンタジーである方が見るお客さんが楽しいと思ったので、そういうことを一つ一つ議論をして、すごく良い関係でルミナを作ることができた。モーメントファクトリーさんとはいまだに連絡はとっている。実施している間は監修してほしいといわれて、年に3回くらい、自分が直接見に行って、音のひずみとかがないかなどを確認して、レポートを出している。

——：ロストカムイはそれと同時進行で進んでいたということですね。「二軍では嫌だ」とはっきりと表明したというの、とても大切なことですね。

床州生：日本人のいいところでもあり悪いところでもあるのは、「それはしょうがないか」とうやむやにしてしまうところ。でもモーメントファクトリーは、向こうもはっきり言うてくるからこちらも言いやすかった。違いがあるからこそ、「黙っていても伝わらないからはっきり言わなくちゃ」という気持ちもあった。ちょっと話はそれるけれど、例えばどこかの団体がアイヌの歌や踊りを依頼してきた場合、その会場や音響設備のことを確認するようにしている。何年前に雪まつりで、アイヌのおばあちゃんがステージに立っていた時、ちいさなスピーカーを横に置いて、その横にマイクを置いて歌っていた。こんなに広いところで、しかも外で、そんな扱いは良くないとずっと思っていた。環境のこともはっきり言わないと、こちらのクオリティが低いと思われるから、きちんとというよう

にしている。謝金もきちんと、1日拘束したらいくらというようにしている。僕らの歌や踊りは特殊技能だと、他の人は持っていない財産だと思っているから、そんなに安売りはしたくない。例えばホテルでも、どこかの企業のパーティーで演じてくれないかと言われることがある。その場合、一人あたりの謝金を設定して、宴会場のカラオケ機材ではない、きちんとした音響機材を入れてくれるならやりますと条件をつけたら、結果的にその会社からは感謝された。そういうことも、ルミナやロストを経験してある程度機材のこととかもわかってきたから言えるようになってきた。

——：ルミナの方はモーメントファクトリーが主導していたと思いますが、「ロストカムイ」の方はどのように進んでいったんですか？

床州生：モーメントファクトリーとの仕事で坂本さんに会って、最初はいかにも「業界」っぽいチャライ奴だなと思っていたんだけど(笑)、坂本さんは全体を見れる。映像も音響もわかるし、コピーライターをやっていたから台本もかける。そこでどうしようと相談するうちに、「ルミナ」は伝統的なユーカラをベースにしたプロジェクトになったので、こちらは新作を作ろうというアイデアで、「ロストカムイ」の前に「阿寒ユーカラ」というタイトルをつけた。僕らが阿寒で作ったユーカラという意味を込めて。別に昔の人たちだけがユーカラをつくれるわけじゃなくて、今の現代のアイヌも、先まで受け継がれるものを作ったらユーカラになると思うから。それで何をやるかという話になって、坂本さんがメッセージというかテーマは絶対必要だからそれを何にしようかという相談のなかで思いついたのは、「カント オロワ ヤク サク ノ アランケッ シネッ カ イサム (天から役目なしに降ろされた物はひとつもない)」という、アイヌの中でもおそらく一番有名な言葉で、これをテーマにしようと。今の時代にもあっているし、みんなに伝わるテーマだと。もう一つ相談したのは、阿寒湖は帯広、釧路、北見のちょうど真ん中あたりにあって、3-40代のファミリー層がドライブにくる。古式舞踊の公演には年配層がバスツアーで見にきてくれるけれど、この3-40代層は全くヒットしていなくて、いま

で取りこぼしている客層だった。その人たちの取り入れることができるプログラムにしたと言ったら、坂本さんが、じゃあ音もいい音で、映像もカッコよくして、それで一人外部のダンサーを入れたいと提案してきた。カムイはクマやフクロウに比べて登場することが少ない、絶滅してしまったオオカミにしようと思見を出し合って、それをベースに坂本が台本を書いた。今までやったことがないことが多かった。最初、最初はダンサーを入れることも、舞台の構成もぼんやりとしたイメージだった。最初にダンサーとして紹介されたKARINというダンサーは、真金の金髪で眉毛もなくてちょっと驚いた。そのダンサーと振付師に東京で会った時も、最初は「派手な二人がきたなあ」と思った(笑)。でもダンサーって派手だけど、すごく真面目で、ストイックだった。音楽とか映像とかを同時進行で進めていて、音楽監督を誰にしようかという相談をしている時には有名なミュージシャンも候補に上がっていた。でもその頃にはチームが出来上がってきていて、方針が違うんじゃないかということで、札幌拠点のDJの名前が上がった。俺はDJってレコードを回す人だと思っていたけど、その人はニューヨークとかパリとかドバイとか、世界各国でDJをしていて、いろんなところでフィールドに出て音を録音して、それを使って音楽を作るという話を聞いて納得した。本人が阿寒に来た後、一緒にボッケに行って、ボッケの「ボコボコ」という音を録音したら、その「ボコ」というひとつを使ってビートを作った。トンコリの中に入っている玉が楽器に当たって「カツン」という音も、ビートの素材になったし、踊っている時のエムシの柄が「シャンシャン」と鳴る音とか、風の音とかカラスの鳴き声とかも。オオカミの「ワオーン」という鳴き声も録りたくて、円山動物園や旭山動物園まで行ったけれど、なかなか都合よく遠吠えしてくれなかった。だから舞台上で使っているオオカミの遠吠えは、実は人間の声を加工したもの。

——：その音が全て「ロストカムイ」の音楽に使われているということですか。

床州生：もちろん。そのころから、映像とかダンスとか、音楽とか、徹底的にやらないとダメだなと

思い始めた。そのころ、「ロストカムイ」を担当するか、オリンピック・パラリンピックを担当するかという相談があった。秋辺デボがオリパラをやりたいと言って、自分はルミナもやったから希望してロストカムイの担当になった。せっかく予算もかけてこういう機会もあるから、勉強のために全部一緒にやろうと思った。この音楽担当のDJは高橋邦幸さんという方だったんだけど、イコロで箆って音作りをするにも、イコロの営業が終わってからやるので、夜の11時ころスタートして夜中の3時か4時までずっと一緒にやっていた。最初は、「床さんこの音どう思う」と言われても、さっぱりちんぷんかんぷんだったけれど、例えば「今回は1週間居ますから」と言われて全部の行程に付き合っていたら、だんだん音のこともわかるようになってきた。ああ、こういう風な組み合わせで作るんだ、とね。最後の輪踊りの音も、最初は普通の女性の歌を録音したものがあっただけ、二人で「何かが足りない」と言い続けていて、もうすこし、包み込むようなものが欲しいという話をしていた。そうしたら邦幸さんが、「いいアイデアを思いつきました。明日男性陣と歌いましょう」といって、アイヌだけでなくプロジェクトに関わっている7-8人のメンバーと、「エッサーホーホー」と歌ったらすごく広がりが出た。「明日音を被せてくるから、現場で聞こう」と邦幸さんが言ったので、翌日会場で聞いたら、二人とも涙が出てきた。こんな優しい輪踊りの歌初めて聞いたと。映像は映像で、WOWという会社とやったんだけど、東京まで行って最初のプロトタイプを見せてもらった。そうしたら、なんのことはない映像で、全然面白くなかった。それで、「なんか馬鹿にしている？東京まで来てこんなの見せられるの？」と思わず言ったら、WOWがそれに対して腹が立ったみたいで、「じゃあ徹底的にやる」と言ったらいい。今ではすごく仲が良い。そう思ったのは、俺がアニメーションを作る行程を知らなかったからなんだけど、でも「床さんにそう言われたから徹底的にやることに決めたんです」とあとで教えてもらった。WOWというのもすごく忙しい会社だけれど、阿寒湖まで来てくれて、どんな映像にするか相談した。そこ



で、阿寒湖の「光の森」というところを舞台にしましょうということとして、そのような森をアニメーションで作って欲しいと依頼した。最初の映像を見せられてどう思うと言われたので、「森って、手前はすごく入っていて楽しいけど、奥が怖いことはよくあるんだ」といったら、「そうか、じゃあ少し怖く感じるような映像にしましょう」というアイディアに繋がった。出てくるオオカミについても、「オオカミはカムイだから、オーラが出ているような感じにして欲しい」といったら、「オーラってなんだ、オーラって見たことない」と。それでも一人途中で阿寒湖から東京に帰って、「オーラ」を作り始めてくれた。オオカミが木の横でパッと消える瞬間があるけれど、そこのシーンに出てくる木も実際にその森に生えている木で、800年、いやもしかしたら1000年以上超えているかもしれないという木。だから、「この木も多分カムイだから、こっちもオーラを纏わせてほしい」と頼んだら、作業が大変なので嫌な顔はされたけれど、素晴らしいオーラを纏わせてくれた。

——：本当に州生さんが深く関わったからできた作品なんだということがよくわかってきたんですが、当初は「想像がつかなかった」と言っていました。まだ想像の及ばないものを判断していく基準はどのあたりにあったんでしょうか。

床州生：まず徹底的に、どういう風なものをつくるのか聞いた。その中で舞台の専門用語ってあるじゃないですか、SEがどうのとか、ホリゾント幕とか。最初はそれも聞いていて、「横から出る光のことです」とか説明してもらっていたけど、あまりにも多かったのが腹が立ってきて、わからない言葉が出たら携帯でぱっと調べて、そういうことかと思いながら打ち合わせをしていた。そうしたらだんだんわかるようになってきて、映像とか、ダンスとか、音楽とか……。最初の方はいいんだけど、だんだん煮詰まってきた、あともう少しというところになったら、各クリエイターは我が強いので結構喧嘩して、それをまとめる役割が自分になってきた。「まあまあ」で済めばいいけど、だんだん口も悪くなってくるし、禿げるんじゃないかと思うくらいげっそりした時期もあった。人間関係とか、やらなきゃならないこととか、蓋を開けたらと

んでもない世界に入ってきたという感じ。

——：こういう多くの人が関わって大きな予算が動く事業って、わからない言葉が頻発して「もういいや」となってしまったり、大事なところでは関わらせてもらえなかったりすることもあると思うんですが、床さんが喧嘩の仲裁に入るといことは、床さんがプロジェクトの中心にいて、みんな床さんに愚痴を言いにくるということですね。ここまで徹底的に関わるんだと決めたのはどうしてですか？

床州生：いちばんにはとにかく面白かったから。やっているプロジェクトが面白くて、「これができれば何かちょっと違うことが起きる」という予感があった。喧嘩するほどみんな真剣にやっている。まあ喧嘩も、中にはくだらないこともあって、「あいつらいいもの食ってる」とか(笑)。でもやっぱりみんながいいものを作りたいから喧嘩になっているわけで、徹底的にやっ、て、なんとか間にも入ろうと思った。それでも会う人会う人がすごく刺激的な人が多くて、多分それがいちばんだと思う。坂本が大体の大枠が固まってきたとき、「ビジュアルを撮りたい」といってきたので、「ビジュアルって何」「ああフライヤーとかポスターとかの元になるものです」という会話があって、いろんな候補がいた中で、人気のあるヨシダナギという人がいて、その人に写真を撮ってもらいたいんですという提案を受けた。世界の先住民の写真を撮ったものを見せてもらって、ああカッコいいなと思った。ちょうどスケジュールが合って、「まだ日本では撮影していない、アイヌだったら撮りたい」という話だった。打ち合わせで初めて会った時、マネージャーがすごく雰囲気のある人で、最初はその人がヨシダナギだと思っていた。そうしたら違って、隣にいた若い女性がそうだった。ロケーションにいきこうという話になって、雄阿寒岳とか、滝に連れていったけど、全然気乗りしていない感じだったので、「何が違うの？」といったら「後ろがスッと抜けている感じがいいんです」と。それで色々なところをみて、俺にはさっぱりわからなかったけど、坂本と二人で話をしていた、ここで撮影したいというところが見つかった。そのあとナギ

さんが坂本に、ありきたりじゃなくて本格的なアイヌの衣装を用意してくれとリクエストした。ヨシダナギの徹底的なこだわりで、木綿の着物ではなく、明治以前のアイヌが来ていたものということで、アットゥシの着物を探すことになった。最初は博物館に電話をかけまくって、貸してくださいと言ったけれど、外で撮影するといったらもちろんダメだと言われた。博物館が貸してくれないので、二風谷に電話をして、外で撮影するので貸してほしいと頼んだら「全然いいぞ」と言ってくれて、貸してもらった。西田（正男）さんと秋辺デボさんだけが自前のもの。衣装が揃ったら今度靴はどうしようかという話になり、鹿皮の靴は皮を買って作った。鮭靴の方は、博物館はやはり貸してくれないので、こちらも作るしかないと思って結局作ることにしたが、ホッチャレを売っているところがなくて困った。釧路市の水産課などに電話してもダメだったけれど、最終的に札幌の豊平川さけ科学館から冷凍しているホッチャレを譲ってもらえることになった。坂本は実家が寿司屋さんなので、お父さんに頼んで捌いてもらい、皮だけにして干して、資料を見て制作した。失敗するかもしれないから多めに6足作ろうということになり、札幌大学のウレシパクラブの学生さんたちに手伝ってもらって一緒に作った。

——：それだけで一大プロジェクトですね。

床州生：そうして衣装が揃ったので、1月、朝の4時に集まって、湖の氷上で撮った。ヨシダナギさんは日が昇る寸前と落ちる寸前にしか撮影しない。それでこの写真が出来上がった。

——：この衣装も靴も、本編のロストカムイの方ではぜんぜん登場しないものですね。

床州生：そう、そこが坂本の策で、いままでいろんなアイヌの人の写真を見たけど、ポートレートみたいなものしかないから、すこしファッション性というか、カッコいい写真を撮りたいというコンセプトだった。実際この写真を見て、「ロストカムイ」はなんのことかわからないけど、とにかく見に来たというお客さんも何人もいる。今までイコロでやるプログラムの宣伝は、旅行とか旅雑誌とかの媒体がほとんどだったけれど、これのおかげでアウトドア雑誌とか、

ファッション雑誌から連絡が来た。この写真を撮って本当に良かったと思う。

——：ヨシダナギさんは最近ソーシャルメディアで批判も受けていました。

床州生：俺には気にならないことだったけど、いろいろ言いたい人もいるよね。

——：外の人がたくさん関わったことで、内部からの反対の声や反発はありませんでしたか？

床州生：ないですよ。言わせないです、こんなに頑張ったんだから。ここの阿寒湖のコタンには外のものを受け入れる土壌がある。そもそもコタンがなかったところに、90年前くらい、札幌、旭川、帯広、釧路とかのアイヌが前田一步園の土地を借りて新しいアイヌコタンを作ったから、いろんなところの文化が混じり合って、今はもうハイブリッドもハイブリッド。何年か前までは、「阿寒は文化をぶっ壊してる」と言われることもあった。アイヌ文化の中に多様性があったので、エカシたちも喧嘩ばかりしていたらしいですよ。俺たちのところは違う、とか。だからこそ「ユーカラ座」みたいなのが生まれたし、「ユーカラ座」も外部から俳優さんを連れてきて一緒にやったりしている。みんなそういう経験しているから、「ロストカムイ」を作っていることに関しては批判はない。議論があったといえ、ば、「ロストカムイ」の第二期の時。その前に舞台を見にきていた夏木マリさんが「面白い、でも私ならもっと面白くできる」と言って、関わってきてくれることになった。興行的にも成功していたから変える必要はなかったけれど、「ロストカムイ」はまだまだ変われると思ったので、手伝ってもらうことにした。そこでマリさんが、シヌイエを使いたいと言い出した。「あれは誇り高いアイヌの文化なんだから、こういう舞台で使ったらどうか」と言われ、俺は最初「いいですね」と言ったけど、あるおばあちゃんに、「男が決める文化じゃないぞ」と言われた。それはその通りだと思って、マリさんも同席してもらって、女性の出演者に意見を聞きたいと言って集まってもらった。そうしたら、実際自分の家族の記憶があるので嫌だという人もいた。でも全体の意見を聞くと、確かに誇り高い文化だから使ってもいいんじゃないかという人が大半だった。こちら側で勝手に決めるんじゃ

なく、みんなで話し合って納得して舞台でも使うことにしたので、この経験は「ロストカムイ」をやっている中でも良かった出来事の一つ。

——：多くの人が関わっている舞台では、こうやってみんなで相談して意思決定をしていくというのは簡単なことではないですね。

床州生：普通舞台は監督のもので、監督がほとんどのことを決めなければならぬけれど、ずっとユーカラ劇とかを見てきて、「ここは違う」という感覚があった。だってプロの役者が、オーディションをして出ているならいいけど、ここはここに住んでいる人たちで作るから、プログラムを作るたびにやいのやいのと、当然いろいろある。それは聞くけど、聞くところと聞かないところをはっきりさせないと、とは思ってやってはいた。後から聞くことも、後から変えることもできると思っていたから、最初はかなり強引に進めていた。さっきの話にあったようなクリエイターどうしの喧嘩もあったから誰かが決めないといけなかった。

——：よい意見のぶつかり合いが起きている時に、最終決定権をもっていたのは誰ですか？

床州生：俺がなんとかしないといけなかったよね。ダンサーとかが阿寒に来て、寮も探さないといけなし、Wi-Fiが欲しいとか冷蔵庫が必要だとなっていて、通信会社に電話したり、もうお金がないからどこから冷蔵庫をもらわないとというので、ホテルとかあちこち行って頼んだり。最終的には観光汽船の冷蔵庫をもらったんだけど、最終的なことは全部俺がやると決めてたから。

——：それはもうクリエイションだけでなく全てにおいてということですね。

床州生：「ロストカムイ」が最終的にでき上がったとき、通常だったらホテル業界とか旅行業界の人を呼んでお披露目をするところを、坂本は「そうじゃなくてパーティーをしましょう」とまたよくわからないことを提案してきた。例えばきてくれたお客さんに、トノトやアイヌのご飯をだして、俺とヨシダナギのトークショーを見てもらって、それで盛り上がってきた頃にガンッと「ロストカムイ」を出しましょうと。首都圏や道内からも、ソーシャルメディアで力を持っているような発信力のある人たちをわざわざ

呼んで、発信してもらうという形をとった。ファッション業界のひとつか、ロストカムイを作った人たちの周りの人をたくさん招いた。最後は立ち上がって拍手もしてくれた。

——：それはわっと話が広まったでしょうね。

床州生：広まると思ってただけだね。3月末に完成してみんなが帰って、4月初めから公演開始だった。2019年。最初は集客も入って5人とかで、それが1週間続いた。みんな不安になったので、1週間やったあとに、ロストカムイの公演のあとに10分間ミーティングを必ずやった。言うことは一緒なんだけど、「人が入らないのは、我々理事がプロモーションをちゃんとできていない、まだロストカムイのことが伝わっていないからお客さんが少ないけど、やっていることは絶対に間違いがないから、このクオリティを保とう」とずっと言っていた。そうしたら、すこしずつ人が増えてきた。今は撮影禁止だけど、最初は写真OKにしていた、徐々にソーシャルメディアに写真が上がっていった。そしたら5月のゴールデンウィークくらいにお客さんの数がドンと上がって、今までシアターイコロ開業以来最高の売り上げを叩き出した。もう今年で6年目。踊り手がだれることがないのがロスト。だいたい何年もやっているとなれちゃう。それが無いのが強み。

ところで完成したから、クリエイターとかがみんな帰って行って、その後に来る取材は全部俺がやらなきゃならなかった。今でこそこうやってしゃべっているけど、俺は本当は無口なタイプで、本当に喋るのが苦手だった。特に人前では。取材とか、人に物を頼んだり、冷蔵庫くれとかね(笑)、いろいろしているうちに、だんだんペラペラ喋るようになった。今はどこかの会議に行っても資料もなく話してくれと言われても話せるようになった。

——：私が最初に見たのは2020年だったので、すでに2期目だったんですが、1期と2期はだいぶ違うんですか？

床州生：まずダンサーが女性1人から男性2人変わった。今はまた1名に戻っているの、いうなれば3期目かな。この変更は大変だった。最初女性ダンサー1人の時には、来てくれたKARINさんの他にもダンサーを探さなくては

ならなかったの、坂本が北海道中のダンススクールにいて、『ロストカムイ』に出ませんか?」とスカウトして回った。複数いないと、1人じゃ休みもあるから回らない。そうやってきてもらったのに、第2期に男性2人にするとき、自分の役割として、そのダンサーをクビにしなければならなかった。それは俺の役目だから、本人にも、また共演しているコタンの踊り手にも言わなくちゃいけない時が、結構辛かった。コタンの踊り手たちも、このダンサーに優しくしてたし、情が湧いているから。だから2年目の春になる前に「夏木マリさんに手伝ってもらって最終的に決めたのは俺だから、マリさんのやりたいことも聞きたい」と伝えた。男性のダンサーで2名というのはマリさんのアイディアで譲れないところだった。踊り手たちにはえらい怒られた。興行も順調なのに、なんで変更しないといけないんだと。でも、何かを変えていかないともっと良くなっていかないと思ったから。そしたら、そのあとすぐにコロナウイルスが世の中に広がってしまった。男性のダンサー2人の体制になったので、1人が怪我をすると舞台が成り立たなくなるので、常にダンサーが3人阿寒湖にいなければならなくなった。しかも1期目はストリートダンスの人でも踊れる振り付けだったのが、2期目はクラシックバレエやコンテンポラリーダンスの振り付けになったので、その分野で男性のダンサーが圧倒的に少ないということも分かった。マリさんが選ぶのでレベルの高いダンサーが来ていたこともあって、コロナウイルスの対策も入って、上演ができない日も出てきた。1年間が終わるころ、マリさんに電話して、このままやったら飛行機代とか色々なことが回らないので、女性一人に戻したいと思うので、納得してくださいといった。マリさんも舞台をやっている人だから、しょうがないねと言ってくれたけど、でもそれまでマリさんが関わってくれたところは使わせてもらっている。パーカッションに厚みを持たせたりとか、そういうこともいろいろしていたので。関係性は今でもすごく良くて、マリさんがやるライブやフェスに、阿寒湖アイヌコタンの人がビデオで参加したりということもある。

——：女性1人に戻った時を3期目とすると、それは

2021年の春からですか？

床州生：そう、1期・2期・3期がそれぞれ1年ずつ。

3期目として再スタートしたときは、まだまだコロナ感染の世の中だった。シアターイコロは全然オープンできない時もあった。今ようやく「ロストカムイ」は完成したと思えるところまで来たかなと思う。3回変更があったことによって、削ぎ落とせるものは削ぎ落としたし、加えられるものは加えたから、それは良かったと思っている。

——：「ロストカムイ」以降はいかがでしょう。今年は「満月のリムセ」という新しい舞台も出来ましたね。

床州生：このコタンでは、現在やっている演目のプロモーションをする予算がつくときと、新作のためのお金があるタイミングがある。今回はアイヌ交付金を活用して新しい舞台を作るとなっていて、(秋辺)デボさんもそろそろ新しい舞台を作りたいという話になり、自分は「ロストカムイ」をやったし、ウタサ祭りとかもやっていたし、今回は担当しなかった。でもこの新しい繋がりから、日本フィルハーモニー交響楽団(日フィル)とのコラボレーションもあった。日フィルは、落合研一がジョン・ケージのパフォーマンスをやるのに誘われたもので、これらも「ロストカムイ」のつながりから来ている<sup>2)</sup>。WOWが映像で参加していて、落合さんがアイヌのコミュニティとつながりを探していて実現したもの。いってみたらサントリーホールという日本のクラシックの舞台としては最高峰のところで、俺はマネージャーみたいな感じで、コタンの踊り手やトンコリ奏者を連れていった。その前の年もやっていて、2年連続で参加した<sup>3)</sup>。

——：ジョン・ケージの作品は、あちこちでお経や舞踊や語りが同時進行で鳴っている、偶発性の高いパフォーマンスでしたね。「ロストカムイ」の過程でいろいろなタイプの人にあったからこそ出会いですね。

床州生：本当に、ロストカムイを作ったおかげというか、真剣に外のクリエイターとかミュージシャンとかとやったおかげで、いろんなところに呼ばれていて、それは本当に俺の財産になっている。

——：最後に、「ロストカムイ」の後、「ウタサ祭り」と



いうイベントを4年続けて実施しました。こちらでも関りが深かったと思うのですが、何が印象的でしたか？

床州生：いま阿寒湖で俺がやっているのは、「アイヌの文化はこういうふうに進化もできるよ」と伝えること。それをミュージシャンの力を借りてできたというか。ただ昔の歌を昔風に歌うということも、古式舞踊としてずっとやっているけど、でも「こういうふうに伝えることもできるよ」とことも見せたい。例えば中村佳穂さんというミュージシャンがウタサ祭りに出てくれたんだけど、その後、彼女の「スカフィンのうた」という曲に、コタンのみんながバックコーラスで参加した。中村さんもわざわざ阿寒湖まで来てくれてレコーディングをしてくれた。そういうこともできるんだというね。こういう外とのつながりは、これから活躍する若いアイヌには刺激になると思うし、こういう文化の繋げ方もあるというのは、ウタサ祭りで伝えられたことかな。まだまだこれからも伝えていきたいし、やろうと思っている。

——：「ウタサ祭り」は終わってしまったんですか？

床州生：いや、交付金に頼ってやるのをやめただけ。いまプロジェクトとして動いているのは、自分たちでお金を集めて、もっと自由にウタサ祭りをやりたいと思って。ウタサ祭りから派生したプロジェクトとして、今度沖縄の宮古島で12月に事業が企画されている。2023年のウタサ祭りで、新城大地郎くんという沖縄のアーティストと一緒に作品を作って、それを2023年のメインビジュアルにした。大地郎くんも「ウタサ祭り」のために阿寒湖まで来て、彼は宮古島の出身なので、宮古島でウタサ祭りをやりたいと言ってきて、いま計画しているところ<sup>4)</sup>。大事なことは人と繋がることだと思っていて、そこでどういう選択をするかによって次が決まっていく。「ロストカムイ」の最初に会った金髪のダンサーも、今では第2期のためにやってきた男性のダンサーと結婚して、阿寒湖に移住して、ダンススタジオをオープンしたばかり。ウタサ祭りに出演したGEZANというバンドは、こちらは予算も謝金もそんなにたくさんは払えないのに、全国ツアーの最終日を札幌にして、機材の運搬費が安く上がるようにしてくれてまで出

たいと言ってくれた。ボーカルのマヒトはプライベートでもきてくれている。こういう人とのつながりが、今までやってきたものの全てだと思っている。

(了)

## 注

- 1) 国立民族学博物館は2016年、倉敷は2013年の第27回倉敷音楽祭。
- 2) 2022年8月25日「《遍在する音楽会》落合陽一×日本フィルハーモニー交響楽団プロジェクトVOL.6」(於サントリーホール)において、ジョン・ケージ作曲の「ミュージサーカス」に「阿寒アイヌ(山本栄子、床みどり、渡辺かよ、下倉絵美、郷右近富貴子、西山知花)」が参加。ダイジェスト版が同楽団のYouTubeに掲載されている。(https://www.youtube.com/watch?v=N9C74aZlo6I)
- 3) 2021年8月11日「《醸化する音楽会》落合陽一×日本フィル プロジェクトVOL.5」(於サントリーホール)において、伊福部昭作曲「土俗的三連画」の前に、「アイヌ伝承音楽」としてトンコリで渡辺かよと西山知花が参加。ダイジェスト版が同楽団のYouTubeに掲載されている。(https://www.youtube.com/watch?v=Ek-M4d\_oGU8)
- 4) インタビューの際は計画中だったが、2024年12月11日、沖縄県宮古島GOOD LUCKIで「ウタサミヤーク」が開催され、宮古島と阿寒湖のアーティストに加え、ゲストとして中村佳穂が参加した。